

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號五第 卷五十二第

行發日一月一十年二和昭

## 論叢

利子の泉源について . . . . . 文學博士 高田 保馬

租税に於ける家計 . . . . . 法學博士 神戸 正雄

近世貿易の趨勢 . . . . . 文學博士 三浦 周行

徳川時代に於ける長崎の支那貿易 . . . . . 文學博士 矢野 仁一

普遍化了解科學 . . . . . 文學博士 米田庄太郎

文化現象の凝集作用 . . . . . 法學士 恒藤 恭

## 說苑

岡山藩の自營船廠 . . . . . 經濟學士 黒正 巖

## 雜錄

明治維新の成否新當時の維新に關する一觀察 . . . . . 經濟學博士 本庄榮治郎

産業界變動の豫測 . . . . . 經濟學士 大塚 一朗

海上保險の發顯地に關する一異說 . . . . . 經濟學士 近藤 文二

戰前戰後の歐洲財政 . . . . . 經濟學博士 沙見 三郎

## 雜 錄

### 明治維新の成否に關する

### 維新當時の一觀察

本庄榮治郎

一

明治の大業は王政復古であつて亦維新である。幕府諸侯版籍を奉還して廢藩置縣のことは、我が國土人民は凡て天皇に歸し政治上の統一を見るに至つて所謂王政の復古を見、五ヶ條の御誓文によつて立憲の新國是を定められたものであつて、是れ即ち維新である。東洋に邊在せる一孤島として歐米人に藐視せられし状態より列強の班に伍するに至るまでの大變化大發達は、何れも明治時代における政治社會經濟上の新政の結果に非るは無い。

二

世には明治の新政を以て大化の改新に比する者が多い。然し大化の改新に於ては從來豪族が土地人民を私有せし制度を改めて國土人民を直接皇室に屬せしめ天下一統天皇親政の實を舉げしものであるが、而もその改革は必ずしも永續せずして中興の功臣は數十年の後、更に一の豪族となつて莊園制度の發達を見るに至つたものである。またかの建武の中興の如きも須臾にして覆され、政權は再び武家の手に歸した。然るに明治の新政の後に於ては、一の幕府倒れて他の幕府復た興るが如きことなく、維新の鴻業を大成するを得たものであつて、明治の維新が、大化の改新や建武の中興と比して大なる差異あることを知らなければならぬ。

三

かく明治の維新が大成されたことについては何等かの原因が無くてはならぬ。勿論それには種々なる原因を考へ得るが、改革が一般國民を背景とせるや否や、換言すれば改革が國民の自覺で行はれたか否やといふことが重要な原因

であらう。思ふに大化の改新は政治上の必要から生れたものであつて必ずしも國民一般の文化の進歩に促されたものではなかつた。またかの建武中興の如きも一般國民は何等與り知る所なく、大義名分の如きは少數識者の間に唱へられて居たに過ぎぬ。然るに明治の維新は社會の各方面にその思想が浸潤し一般國民を背景として行はれたものであつた。これが明治維新の成功せしに反し、大化改新や建武中興の大成せざりし原因、少くとも重要な一原因であると考へられる。

#### 四

私は最近「慶應四年京都大阪出張之記」と題する寫本一冊を見るの機會を得たが、それには「世上形勢書の事」と題する條下に、次の如き意見が記されてゐる。

「一、俗論家云、王政にては世は治らずと。

是は時勢の移變に眼をつけず、何時も世の中は同じものと思ひ居る人の言にて、無心ども無眼ども云ふべし。其由來を少しく諭さん。

先神代は差置、人の世と成りて今に至る迄凡二千五百年、其内武家の政を執りしは六百八十年にして、其餘凡二千年は悉く王政にて武家の政事に非らず。然るに王政にて治まらずと云ふは、元弘の頃一度王政に復して亦程なく足利に權を奪はれ玉ひしを云へるなれど、實に無識の論談なり。元弘の復古は上の思食より出たる事にて、下萬民の心より起りしに非ず、此故に上の思食聊動きて忽武家の政道となれり。然るに此度の復古は右に反し萬人元弘の覆轍を恐れ居るうへに草莽より勤王の論起り最初は浪士より始めて藩士に及び、藩士より大夫に至り、大夫より君侯に及び、終に幕府の暴政にて亂し果たる政權を歸し奉れるは、譬ば商家支配人不埒にて大借財となり、進退もならぬ時に至りて其經濟を主人に振歸したるが如し。諸藩の奮發したるは若者共より支配人の私曲を主人に訴たるに似たり。草莽の發起盡力より口々盛大になり、自然に復古したるなれば、萬が一も上の思食が

變ずることも、萬民のこゝろは變せざれば我家に政道の戻るべき道理なし。況や近來の形勢を見よ、幕政にて能々治の得たりや、日々に亂れ果たるにあらずや。

一、又云、王政に復古するを名として其實は諸侯が天下の政權を奪はんとするならん。是こそ實に見込違ひの根基なり。其故は根元草莽より起りて盛大に成りし事なれば、假令諸侯は何と思はるゝとも決して自由にならざる也。

一、今度朝廷御新政の御所置を窺ひ奉るに預末の事迄悉く御下問ありて後に決し給ふ。其公平至當なる御事、予等が言を待たずして知るべし。必其本は薩藝長土を初、周旋の諸侯盡力より出る成べし。然るに此公事を亂さんとするものあらば忽滿天下の蜂起と成る事必定なり。

一、草莽下賤より事の起り初めしは何故ぞ、水戸光圀卿以後世上に名義を論ずる事盛になり、近頃幕罪二百ヶ條など唱ふるに至れり。

然るに外夷の事より積憤發して櫻田坂下東禪寺等の事起り、次に大和但馬の事に及び、其次には大平筑波の事件となり、又其次は長州の三大夫より追々長防二州となり、今は兩國諸藩となる。其時に幕府の所置は嚴重にして最初水戸の數十人を殺せば、櫻田前後には數百人となり、大平筑波の數百人を殺せば數千人となり、終に長防西國數萬となりて、今や威力を以て制しがたし、今度西國諸藩にて萬一復古の事を遂げずば又東南北の諸國も起るべき勢ひ也。其根元を見れば名義、上にくらぐ、下に明らかなるによれり。然れば此後一度も二度も若し幕威を張る事ありても又三年ならずして復古すべき事更に疑ひなし。」

### 五

右に所謂元弘の復古とあるは、建武中興のことを指せるはいふ迄もない。尙、國土は王土にして幕府の私領に非ざるの論、其他の論も見えて居るが、一々之を述べない。たゞ明治の維新が大義名分に基き、國民を背景として起れるこ

とや、一の幕府仆れて他の幕府之れに代ふるが如きことの行はれざる所以を明かにし、幕府を支持せんとするが如きは誠に『名義、上にくらく、下に明らかなる』ものであつて、當時の大勢に暗きものといふの外はない。此等の觀察が、維新の大業成りし後の今日に於て行はるゝことは、必ずしも奇とするに足らずと雖、既に早く維新改革の當初たる慶應四年(明治元年)頃に世上に行はれたことは、誠に國民の意氣を示すものであり、維新の大成せし所以を暗示するものといひ得る。勿論維新成功の原因としては、以上は一方面よりの觀察に過ぎぬものともいひ得るが、その方面よりの觀察としては肯綮に中れるものであり、甚だ興味を感じたゝめ茲にこの一文を草した所以である。